



学校だより

令和7年度 1月号
令和8年 1月8日
さいたま市立大谷口中学校

[学校教育目標] かしこく 美しく たくましく

心をつなぎ新たなスタートを

校長 高村 昌利

新年明けましておめでとうございます。保護者・地域の皆様におかれましては、穏やかな日の中、健やかに初春をお迎えのこととお喜び申し上げます。おかげさまで、無事に第3学期始業式を迎えることができました。心より感謝申し上げます。

本日、子どもたちは新たな気持ちで登校し、元気な笑顔を見せてくれました。新学期早々、生徒たちの様子を見て心から安心し、「みんなでがんばっていこう」と今年一年のやる気がみなぎってきました。体育館には、寒さの中にも凛とした空気が漂い、始業式の校歌の歌声からは、生徒一人ひとりの強い意志を感じ、まさに「一年の計は元旦にあり」という言葉を思い出させてくれました。お正月には、初日の出を拝んだり、おせち料理を囲んだり、書き初めを書いたりなど、古くからの日本の伝統行事が今も大切に受け継がれています。これらの行事には、家族の絆を深めたり、一年の健康や幸せを願ったりする意味が込められています。また、1月7日の「人日の節句」には七草がゆを食べて無病息災を願い、1月15日の「小正月」には豊作を祈る行事が各地で行われます。こうした年中行事を通して、子どもたちが日本の文化や歴史に親しみ、感謝の心を育ていけるよう、学校でもさまざまな学びの機会を大切にしていまいります。令和の時代を生きる今だからこそ、伝統行事の意味をもう一度深く考えることが必要だと感じています。歴史と伝統、家族の絆、友情、教師と生徒との信頼関係、教師同士のチームワークを大切にしていまして、今年も「チーム大谷口中」は一步一步、着実に前進してまいります。

さて、毎年1月2日と3日の二日間、私はテレビの前に陣取り、箱根駅伝を熱く応援します。この時ばかりは、家族の中でのチャンネル権は私にあります。誰に言われるでもなく、家族も自然とその時間を私に譲ってくれるのです。まるで自分が走っているかのように、あるいは自分の息子が走っているかのように、私は画面の中の選手たちに感情移入し、心の底から声援を送ります。東京・大手町から箱根・芦ノ湖までの往路、そして再び大手町へと戻る復路。全217.1kmを、10人の選手が一本の襷に想いを託してつないでいく、その姿に私は毎年心を揺さぶられます。選手一人ひとりに、それぞれの物語があります。ケガを乗り越えてスタートラインに立った者、チームのために自らの役割を全うしようとする者、仲間の分まで懸命に走る者。そのすべての想いが襷に込められ、風を切って走り抜けていく姿に、私は何度も胸を熱くし、涙を流します。駅伝はただの競技ではありません。仲間を信じ、支え合い、託された想いを背負って走ります。それは、まさに「心をつなぐ」スポーツです。新年の始まりに、そんな真剣な姿を目にすることで、私自身も心が奮い立ちます。「今年も全力でがんばろう」「若者たちに負けていけない」と、心が熱くなります。この熱い想いは、私の教育への姿勢にもつながっています。大谷口中の生徒たちが、毎日笑顔で学校に通い、仲間と支え合いながら成長していけることをいつも願っています。一人ひとりの思いを大切にし、心を配り、心をつなぐ教育活動を、今年も全力で進めていきます。生徒たちの未来が、希望に満ちたものになるように、私もまた、襷をつなぐ一人として、生徒たちを大谷口中教職員全員でサポートしてまいります。

本年も、子どもたち一人ひとりが健やかに成長し、笑顔あふれる学校生活を送れるよう、学校・家庭・地域が力を合わせ見守っていきたくと思います。学校全体の一体感を高め、教職員一同チームワークを大切にしていまして教育活動に取り組んでまいります。どうぞよろしくお願いいたします。